学苑・近代文化研究所紀要　第九一一号（一〇）～（三九）（二〇一六・九）

〔史料紹介〕

鈴木荘六「西比利亜日記」(一)

Siberia Nikki by Soroku Suzuki (1)

黒川　智子・松田　忍

Tomoko Kurokawa and Shinobu Matsuda

本稿は、陸軍大将鈴木荘六の「西比利亜日記」の紹介である。

鈴木荘六は明治から昭和にかけて活躍した陸軍軍人である。一九一九（大正八）年八月、鈴木は広島第五師団長（当時中将）として、極東ロシア領三州の一つ、ザバイカル州チタへ出征した。いわゆるシベリア出兵である。「西比利亜日記」は主として出征地チタで書かれた記録である。

【人物】

鈴木のおもな経歴は次の通りである。一八六五（慶応元）年、鈴木高治の三男として新潟県三条市に生まれる。新潟県師範学校・陸軍教導団を経て、一八八八年一一月陸軍士官学校に一期生として入学、一八九〇年七月騎兵科を卒業、一八九三年陸軍大学校に第一二期生として入学、一八九八年一二月に卒業した。日清戦争では騎兵第四隊長を、日露戦争では第二軍参謀・参謀副長を務めた。その後陸大教官、参謀本部作戦課長などを経て、一九一四年八月陸軍少将・騎兵第三旅団長、一九一七年八月には騎兵監となる。一九一八年七月に陸軍中将、一九一九年三月に広島第五師団長となり、シベリア出兵に参加した。その後は大阪第四師団長、台湾軍司令官を歴任、一九二四年八月には陸軍大将・朝鮮軍司令官、一九二六年三月には参謀総長となり、一九三〇年二月まで務めた。後備役編入後は大日本武徳会会長、帝国在郷軍人会会長、枢密顧問官などを務め、一九三七年四月に退役している。一九四〇年二月に死去した。

士官学校の同期生には、のちに陸軍大将になった宇垣一成・白川義則などがいる。

【史料について】

「西比利亜日記」は現在、国文学研究資料館が所蔵しており、「鈴木荘六文書」内に存在する。[1] 鈴木に関する史料は鈴木の死後、坂本貞枝氏（鈴木の長男重雄の長女）の邸宅で長年保存され、二〇〇三年に、鈴木重徳氏（重雄の長男）により同館へ寄贈された。鈴木は継続的には日記を書いておらず、ある役職に就任した際のみ、特別に日記を書いている。そのうちの一つが「西比利亜日記」である。その他史料の来歴、保存状態については『史料目録第九五集　近現代文書目録（その一）』の「鈴木荘六文書解題」に詳しい。[2]「西比利亜日記」は第五師団出兵中―一九一九年八月から一九二〇年九月まで、約一年間の日記である。罫線ノートにインクで縦書きされており、「西比利亜日記Ⅰ」（一九一九年八月一三日～一九二〇年二月五日）、

「西比利亜日記Ⅱ」（一九二〇年二月六日～七月一四日）、「西比利亜日記Ⅲ」（一九二〇年七月一五日～九月七日）の三巻で構成されている。本稿では「西比利亜日記Ⅰ」を紹介する。

鈴木と同じく師団長として、シベリアへ出征した人物の史料には、大井成元（小倉第一二師団長、のち浦潮派遣軍司令官）の「西比利亜出兵ニ関スル思出ノ一端」[3]、大庭二郎（名古屋第三師団長）の「西伯利の惨状」[4]、西川虎次郎（宇都宮第一三師団長）『西伯利出征私史』[5]などがあり、いずれも回顧録である。これらに対して「西比利亜日記」は出征地で書かれており、当時の鈴木の行動や所感、様々な人物との交流の様子について具体的な内容を知ることができる。師団長を任じた将校の日記は今まで確認されておらず、貴重な史料と言えよう。

【背景】

先行研究[6]を参照しながら、第五師団出征当時の国際情勢を見る。

一九一七年（大正六）、第一次世界大戦の最中、ロシア革命が勃発した。二月革命ではニコライ二世が退位、十月革命では臨時政府が崩壊し、レーニン率いるボリシェヴィキ党による共産党政権が成立した。翌年三月、ボリシェヴィキ政権は、ドイツとの単独講和条約―ブレスト・リトフスク条約を締結し、東部戦線は崩壊した。ドイツは対ロシアの兵力を西部戦線へと投入したため、英仏の戦場は激化した。このため英仏は、親独的姿勢を見せるボリシェヴィキ政権に対抗するための反革命政権を擁護させ、東部戦線の再建を試みた。しかし長期化した戦争により疲弊していた英仏に、反革命政府を支援するための余裕はなかった。そこで英仏は、世界大戦に本格的な介入をせず、経済力・兵力ともに余力を残していた日本および米国に対し、対ドイツ政策を理由に、極東ロシア―シベリアへの協同出兵を促した。

英仏の要請に対し、日本政府（寺内正毅内閣）は当初、ドイツ・オーストリアから、シベリアの居留民保護の自衛措置という点での出兵を考えていた。また陸軍では、独自の出兵構想が練られていた。陸軍は「満蒙権益の保護」という大陸政策の一環として、ロシア革命の機に乗じ、シベリアのバイカル湖以東に親日政権―緩衝国の樹立を目標としていた。そのため陸軍はロシア革命勃発直後から、シベリアにおいて、反革命政権の中心となる「穏健分子」の選定を行っていた。その人物の一人が満州里からザバイカル州チタに拠点を置くザバイカル・コサック出身のグレゴリー・M・セミョーノフであった。政府内でもセミョーノフに対する支援は容認され、軍資金や武器の援助を行うようになっていた。日本単独での出兵も考慮されていたが、政府内からは、日本の出兵には米国の経済的支援は不可欠であり、対米協調の点からも米国との協同出兵を希望する声が強かった。

一方米国は、反革命政府の支援には関心がなく、出兵には消極的な姿勢を見せていた。しかし、一九一八年五月、オーストリアの圧政から独立するため西部戦線への合流を目指していたチェコ・スロバキア軍団とドイツ俘虜がシベリア鉄道上のチュリェビンスク駅で衝突すると、米国は友軍であるチェコ軍の救出を目的として日本との協同出兵を決意した。

こうして一九一八年八月二日、日本と米国はロシアの内政に対する不干渉・兵力の制限・チェコ軍団およびロシア国民の救済などを条件として、シベリアへの協同出兵を行った。日本からはウラジオストクへ派遣軍司令部、沿海州へは第一二師団、黒龍州・ザバイカル州に第七師団・第三師団が派遣された。

日本はチェコ軍の救済という目的とは裏腹に、セミョーノフへの独自の援助を続けていた。しかし一方で、連合国が反革命政府の中心に選んだのはセミョーノフではなく、元黒海艦隊司令長官コルチャークであった。英の肩入れにより反革命連立政権の陸相に就任したコルチャークは、同年一一月、オムスクにてクーデターを起こし、反革命政府は事実上コルチャークによる軍事独裁政権（オムスク政府）となった。連合国はオムスク政府の援助を開始した。一九一九年一月、日本政府（原敬内閣）も「秩序維持の責務を任すべき統一政府」[7]としてオムスク政府の援助を本格化させた。また同時にオムスク政府よりザバイカル州軍管区司令官に任命されたセミョーノフへの直接的な支援を打ち切った。しかしその半年後、ボリシェヴィキとの戦闘によるオムスク政府の衰退を理由に、英仏はシベリアからの撤兵を決定する。連合国の足並みが揃わない中、鈴木率いる広島第五師団はザバイカル州チタへ向けて出征した。

【特色】

以下、「西比利亜日記Ⅰ」（以下、「日記」）の紹介である。今回は、「兵力問題」、「日本の中立的立場」、「軍紀問題」の三点に着目し、日記を見る。

1、兵力問題

到着当初鈴木は、先任の第三師団長大庭二郎より「東北部の掃蕩事情、セメノフ軍の状況」を聴取している。[8]

当時ザバイカル州では、オムスク政府の弱体化に伴い、ボリシェヴィキ（以下革命軍）が勢力を拡げていた。セミョーノフ軍も革命軍との衝突が生じ、ザバイカル州東部バグダットスカヤでは交戦状態にあった。しばらくは優勢を保っていたセミョーノフ軍だったが、第三師団が撤兵のために後退すると戦況は日に日に悪化していき、[9]ザバイカル州はこれまでにない混乱に陥っていた。

日本にとって、ザバイカル州は「過激派ノ東漸ヲ捍禦スル」ための「緩衝地帯」であり「緩衝国」擁立の候補地として重要な土地であった。[10]ザバイカル州の「秩序の崩壊」は極東三州に混乱を招き、満蒙権益そのものに影響を与える恐れがあった。そのため、ザバイカル州の秩序の回復は「帝国自衛の為緊急の要件」であった。[11]第五師団の第一の任務は、ザバイカル州の秩序を速やかに回復することであった。

しかし、セミョーノフ軍が対峙しているのは、革命軍だけではない。「日記」にも、九月四日にはダウリヤにおける富陛額[12]の「反逆」、翌五日にはネルチンスキザオード方面における3.Kの半部が「叛逆」の報告が見られるように、各地で反乱が発生していた。セミョーノフ軍の特徴はコサック、ブリヤート、モンゴル、ツングースなどの様々な民族や階級で組織されていたことであるが、そこには意思の疎隔が生じ、軍紀が甚だしく紊乱する欠陥があった。[13]革命軍の優勢に伴い、セミョーノフ軍からは離脱者が多発していた様子が伺える。これに伴い、セミョーノフ軍からは第五師団に対し、頻繁に派兵の要請がされるようになる。[14]しかし、鈴木は容易に派兵を行わず、また浦潮派遣軍司令部からの派兵要請について「兵数不足の今日誠に困たものなり」[15]と苦言を呈している。また九月一五日の日記では、「予の直下にある部隊は歩兵七大隊半に過ぎず、而も一中隊百四十余人のものを以て七百里の鉄道保護、治安の維持を為し、他方にはバグダスカヤー付近に於ける過軍の根拠を掃蕩せんとす。果して成効すべきや、否、大に疑はるゝ所なり」と記した。

当時日本は、ロシア人救済のための手段として、経済的援助―いわゆる「救恤」[16]を優先させており、軍事的行為はなるべく避ける傾向にあった。「治安を紊乱するものある」ときは「露国軍をして之に当ら」せ、必要があれば、反革命軍への「支援」として派兵を行う方針を取っていた。[17]しかし、「緊急の要件」であるザバイカル州の秩序を回復するには、第五師団の兵力は不足していた。これは第三師団から見ても「少きに過ぐる」状態であり、鈴木は第三師団から一部隊を借り受けている。[18]だが第五師団の兵力不足は、革命軍の「掃蕩」以外にも影響を及ぼしていた。一一月一〇日の「日記」には、参謀総長上原勇作に対し、「オムスク方面の情況如何に依り、当師団主力を西方に集中せんとするに当り、西部アムール線を放棄せば、大約七大隊の歩兵を集め得べし。状況右を要求するに至れば、アムール線の大部を放棄するを至当とせん」と伝えている。出兵中、鈴木を悩ませた一つの要因は「兵力不足」であったことが伺える。

2、日本の中立的立場

一〇月二四日の「日記」には、浦潮派遣軍司令官大井成元との談話の内容が記されている。鈴木が大井と会談するのはこの日が初めてであり、主題は日本軍の対露政策であった。大井は最初に「帝国軍隊の価値（有形無形凡ての点）を世界に紹介すること」の重要性を述べた。前述のとおり、日本は出兵に際してロシアに対する「救恤」を優先させていた。ロシア国民の趨向を察し、ロシア国民の支持を得ることは、同時に国際社会における日本の地位を向上させることにも繋がった。また大井は同時に「帝国は決して一方に偏することなく厳む中立の位置に立つ」ことの必要性も説いた。出兵の本質は「穏健分子」によるシベリア自治政府の樹立である。オムスク政府に変わる政府が樹立した際には、速やかに支援を開始する必要があった。[19]この「中立の位置に立つ」という認識は、その後鈴木が、連合国間で生じる問題への対応に示される。そしてそれは問題の解決以上に重要な役割を果たした。

一〇月二五日の「日記」からは、米国からオムスク政府へ輸送される小銃を巡り、両者の間で衝突が生じたことが分かる。鈴木はその際「両者の中間に立ち」、仲介を行っている。

またオムスク政府の崩壊時には、セミョーノフ軍とチェコ軍の衝突も生じた。オムスク政府より極東軍司令官に任命されたセミョーノフは、オムスク政府の「貴重品」[20]をイルクーツクから避難させるため、スキペトロフ支隊をイルクーツクの停車場へ急行させた。イルクーツクでは当時、革命軍と連合国代表者による協議が行われていた。セミョーノフ軍と革命軍の衝突を危惧した連合国総司令官ジャナンは、連合国代表者の生命保護のため、指揮下のチェコ軍を停車場守備に充てた。これに対し、セミョーノフ軍は「ジャナン将軍並に其配下のチェック軍は革命軍に同情を寄せ、隠然之を援助せるもの」と判断し、一方チェコ軍およびジャナンは「セメノフは鉄道運行を妨害しチェックの東方輸送を故意に遅延」し兼ねないと判断、スキペトロフ支隊の武装解除を行った。[21]この武装解除問題は、鈴木や仏国を除く連合国においても予想外のことであった。ザバイカル州の緊張は高まる中、チェコ軍の東進は始まった。

一月一二日の「日記」によると、「近時に於けるチキツヒ及セメノフ両軍は共に神経過敏となり、動もすれば衝突」を起こしかねず「時局の紛糾益々拡大せん」状況であった。そのため鈴木は、ザバイカル鉄道沿線停車場に部隊を配置し「応急の姿勢」を取った。チェコ軍に対し、セミョーノ

フ軍への「暴行を阻止」し衝突を避けるため、「予の貝加爾州に於ける立場を言明し、武力に訴へても其非行を抑止」することを宣告している。[22] さらに一月一七日の「日記」では、チェコ軍の先頭車両がチタに到着するに際し、「露国人心恟々として避難を企画するもの等ありて不穏の形勢を呈す。依りて師団は先日の如く部隊を沿線停車場に配置す。然れとも露国軍隊は尚動揺止ます、独断を以て出動せるもの等ありて由々敷大事を醸生〔成〕せんとする勢となれり。依りて極力セ軍側を圧へると同時に、万一を顧慮してペスチャンカの部隊をも招致せり。」とある。

以上のように鈴木は、主にセミョーノフ軍と連合国軍が衝突する際に中立的位置に立ち、問題の解決を図っていたことが分かる。

元来連合国はセミョーノフ軍の不軍紀を問題視していた。特にコサックによる鉄道妨害は、チェコ軍の救済・ロシア国民の保護を名目に出兵した米国の行動を阻害していたため、両者の関係は著しく悪化していた。[23] 両者の対立は日本にとっても好ましいものではなかった。日本は「救恤」においては米国と競争関係にあったものの、[24] 一方では「米支両国と堅く提携」し、極東における資源開発を行う計画を立てていた。そのため米国との良好な関係を保つ必要があった。[25] しかし、米国のセミョーノフ軍に対する不満の矛先は、同時に日本にも向けられていた。[26] 鈴木にとって「中立の位置」を保つということは、日本にとって「穏健分子」であるセミョーノフと、協力関係にあるべき米国との関係を保つための対応策であった。またセミョーノフ軍が、出兵の大義名分を背負うチェコ軍と正面衝突することは、避けたかったであろう。それは連合国も同様であった。鈴木によるセミョーノフと諸外国の仲介はザバイカル州の秩序を保ち、緩衝地帯を守ることに繋がった。それは時として連合国に「帝国軍隊の価値」を認めさせる行為であったことが分かる。

3、軍紀問題

「日記」中には、第五師団の軍紀に関する記述がたびたび見られる。九月二日の「日記」には青年将校の行為に対する困惑の念が綴られている。出兵に際し、兵士の軍紀弛緩は問題の一つとされていた。革命の勃発した国への出兵という事もあり、現地においての兵士の「赤化」は世間の注目するところであった。実際に現地での、上官に対する侮辱や抗命行為などが確認されていた。[27] 第五師団も例外ではなく、鈴木が丁種勤務演習の際に与えた「訓示」の内容に対し、在郷軍人が「下士以下を侮辱せるもの」である、と反発する出来事が生じた。[28] 鈴木は出征直前の八月一一日、将校に対し、出兵先での言語不通や習慣の違いによる衝突や、出兵地を「我占領地」のように振る舞う行為は日本の威信を失墜させ、また外交問題に発展する危険性もあるため、充分注意をするように訓示を与えていたが、[29] 砲兵大隊による鉄道従業員への威嚇行為の詳報に接したことが八月三〇日に記されている。

また第五師団が出征して間もない八月一九日の「日記」には、広島留守第五師団からの電報―「松山の細木大尉中隊不穏の件」について記されている。第五師団の管轄である松山留守第二二連隊の中隊長細木大尉が、命令に背いた下士官に対し過剰の処罰を行ったため、中尉と下士官の衝突が起こっていた。[30] 出兵地にだけでなく、内地でも軍紀弛緩による問題は発生していたことが分かる。鈴木はこれらに対し、青年将校の指導は難しく、また「世の中も随分六ヶしきものとなれり」（九月一一日）と述べている。「デモクラシーの思潮」[31] が高揚する大正時代において、軍隊の指揮官が常

に統御上の問題を抱え、苦悩していた様子が伺えよう。

以上の三点以外にも、鈴木の「日記」からは次のようなことが分かる。十二月二六日の「日記」では、鈴木は露国中将フレシチヤに対し、日本軍の国事に対する姿勢と「露国の大難来る能く此心を以て上下一致団結」の必要性を説いた。また鈴木はロシア国民の「大難」に対する姿勢をロシア国民の礼儀や素行から感じ取っていた。鈴木は「元来露国なるものは帝政時代の如く」統治されるよりも「独立自治を為さしむるを有利得策」とするのではないか、と記している。またもし大露国の復興を目指すにせよ「一般人民の意向素質に鑑みるに旧時に於ける如き大露国の復興は前途甚た遼遠」であり、反革命軍やロシア国民の「大難」に対する認識の不一致に苦言を呈している。[32] これは「西比利亜日記」全巻を通して見られる記述である。

さらに「日記」からは、日本の資源開発計画や、満蒙権益の保護問題に関する米国・中国との会談の様子が伺える。[33] 特に中国との会談中、ヨーロッパの矛先は再び「戟先は一斉に東洋に向はん」とし、これからは「黄色人種対白皙人種」の時代になる、そのためには「同種同文」である日本と中国が団結・協力し、日支親善を増進させる必要がある（九月二四日）、としているのは興味深い。

以上が「西比利亜日記Ⅰ」における特色である。「日記」の後半部分である「西比利亜日記Ⅱ」および「西比利亜日記Ⅲ」の史料紹介については、別稿に譲る。

〔付記〕

本稿執筆にあたり、史料の翻刻掲載については国文学研究資料館から許可をいただいた。鈴木荘六の令孫・坂本貞枝氏には今回の翻刻掲載を快諾していただき、様々な助言をいただいた。記して御礼申し上げます。

注

1 「鈴木荘六文書」（史料番号九―一～九―三）。
2 『史料目録第九五集　近現代文書目録（その一）』（人間文化研究機構国文学研究資料館、二〇一二年）。
3 大井成元「西比利亜出兵ニ関スル思出ノ一端」（『近代外交回顧録四』、近代未完史料叢書五、ゆまに書房、二〇〇〇年、本文は一九三九年の復刻版）。
4 大庭二郎「西伯利の惨状」（『戦友』一四九号―一六二号、軍人会館出版部、一九二二年―一九二四年）。
5 西川虎次郎「西伯利出征私史」（西川虎次郎、一九二四年）。
6 原暉之『シベリア出兵：革命と干渉　一九一七―一九二二』（筑摩書房、一九八九年）、細谷千博『シベリア出兵の史的研究』（岩波書店、二〇〇五年）。
7 防衛省防衛研究所「浦潮派遣軍司令官等に訓令及指示の件」（C06032008600）。
8 「日記」一九一九年八月二五日。
9 参謀本部編『大正七年乃至一一年　西比利亜出兵史』（上513頁、新時代社、一九七三年、本文は一九二四年の復刻版）。
10 外務省外交史料館「原内閣成立後自第二十回至第二十二回／二　第二十一回大正八年八月一五日　一」（C03030029200）。
11 注7に同じ。
12 富陸額はモンゴル軍兵士であり、この時期セミョーノフ軍に参加しダウリヤでの活動をしていた。防衛省防衛研究所「附録第一五号　民国陸軍参謀駱斌ニ関スル件報告」（C13110258700）。

13 防衛省防衛研究所「西伯利出征間の状況上奏の件」（C07060849000）。
14 「日記」一九一九年八月二六日、九月四日、同月五日。
15 「日記」一九一九年九月六日。
16 「救恤」については井竿富雄『初期シベリア出兵の研究』―「新しき救世軍」構想の登場と展開―（九州大学出版会、二〇〇三年）に詳しい。
17 注7に同じ。
18 「日記」一九一九年九月一五日、九月一七日。
19 注7に同じ。
20 「日記」一九二〇年一月三日。
21 外交史料館「七　大正八年末ヨリ九年始ニ亘ル「イルクーツク」政変ニ関スル調書二（B03051227100）。
22 「日記」一九二〇年一月一三日。
23 加藤博章「シベリア出兵における軍事関係」―米国シベリア派遣軍司令官を中心に―（『軍事史学』第四八巻　第三号、二〇一二年）。
24 注16と同じ。
25 注7に同じ。
26 「日記」一九一九年九月一日。
27 藤村道生「シベリア出兵と日本軍の軍紀」（『日本歴史』二五一号、吉川弘文館、一九六九）に詳しい。
28 「日記」一九一九年九月一一日。
29 「鈴木荘六文書」（史料番号二五六―一二―四）。
30 『読売新聞』（一九一九年八月二九日付記事）。
31 浅野和生『大正デモクラシーと陸軍』（関東学園大学叢書九、関東学園大学、一九九四年）。
32 「日記」一九一九年一二月九日。
33 「日記」一九一九年九月二三日、九月二四日。

【凡例】

本日記の翻刻にあたっては、原文に忠実であることにつとめたが、読みやすさを考慮し、以下の準則を定めた。

一、字体は原則として、本文中のカタカナ・変体仮名は平仮名に改めた。但し、人名・地名等の固有名詞についてはそのまま用いた。また、漢字は概ね、新字体および通用の字体に改めた。
二、句読点は適宜付し、段落・改行は原文に従いつつ、適宜整えた。また、闕字・平出は詰めた。
三、修正部分については、修正された部分のみ起こし、明らかな誤字と判断できる部分は〔　〕で訂正した。また、固有名詞（外国人名・地名など）のカタカナ表記については、表現の揺れや誤植の判断がつきにくいため、原文通りとした。編者注記は〔注〕とした。
四、人物に関しては初出時に［　］を付して、適宜補った。
五、欄外の記述は（欄外）とした。
六、解読不能の箇所には□を付した。
七、原文中の一部に現在の視点からは不適切な表現が見られるが、歴史史料としての性質上、原文のままとした。

【日記表紙】
第五師団長
㊙　西比利亜日記　Ⅰ　Sauzouki　自大正八年八月十三日至大正九年二月五日

【本文】
大正八年八月西比利亜出征日記

八月十三日　晴　炎暑焼くが如し
午後二時、侍従武官［松下東治郎］より宇品埠頭に於て左の御沙汰を受く。
　師団長以下一般のもの丈夫にして任務を果すべし。
　将卒乗船出発の模様を見て帰れ。
右に対し予は、
　優渥なる御沙汰を賜り臣等感激の至に堪へす。臣等益奮励、聖旨に添へ奉らんことを期す。
　右言上を乞ふ。
午後三時、解纜す。
此日見送者の主なるもの加藤海軍大将［定吉、呉鎮守府司令長官］、広島山口両県知事［若林来蔵・中川望］、志方［鍛］控訴院長等なり。
　半巾を揮つゝ送る群のうちに目につくものがある哉

八月十四日　晴　風稍強し
未明馬関を過ぐ。六連島にて停泊す。
午前九時、六連島を出発北向す。
此日浪高く船の動揺甚し。
騎兵用乗馬一頭斃死す。蓋し心臓強きに拘らす風入悪き場所に置きしに因るならん。

八月十五日　風強く浪高し
正午、鬱陵嶋附近を過ぐ。該島は往年日鮮間の国際問題を起せし所にして又日露役敵提督［ロジェストウエンスキー］の捕獲せられし所感不尠。
此頃より風稍凪［凪］ぎ浪低し。

八月十六日　風強く浪高し
船内の大部分、頭を抬ぐるものなし。
　新高の山の如くに功を
　　掲んと勇む大和男の子等

八月十七日　風強く浪高く雨降る
午前十時三十分、浦塩埠頭着。降雨の為め大部分上陸を見合はす。
予及び副官は憲兵司令官宿舎に投宿す。
　揮りかざす大和男の子の太刀風に
　　掃ひ清めん西比利亜の原
　十年余り秘め蔵めたる我太刀を
　　今ぞ試さん西比利亜の原
午後二時三十分、軍司令官［大谷喜久蔵、浦潮派遣軍司令官］に伺候す。此夜軍司令部催の歓迎会に臨む。

八月十八日　晴
午前十一時、軍司令部に出頭。参謀長［稲垣三郎、浦潮派遣軍司令部参謀長］より一般情況其他の件に関し承知す。
此夜軍司令部上陸一周年記念会に臨席す。午後、歩兵第二十二連隊宿営地を巡視す。
此日午後、参謀長をして22i長［井上弟五郎］の統御上に就て注意を与へしむ。22i長も自覚にありて修養を積む気ありとのことなりき。

八月十九日　晴
午前十時、軍司令官の訪問を受く。
留守参謀よりの左の電報あり。
　松山の細木大尉中隊不穏の件。
細木大尉は従来統御訓導の上に於て属し処罰せられ、又訓戒を受けたることあり

と云ふ。然るに今日此事あるは監督者の不注意の罷免るべからす。
午後一時半、明二十日師団司令部出発に関する時刻の指示を受けたり。
　鯉のほる勢もてる兵士の
　　行くてさへきるものはあるまじ
午後三時より各国武官を訪問す。仏少佐ルノンドに邂逅す。

八月二十日　晴
午前九時二十分、浦塩停車場発特別列車にて西行の途に就く。見送人大谷軍司令官、其他多数ありたり。
広陵たる大平原綿原峰涯なり。野花満開毛氈の如き観あり。
　かぎりなき野原色どる萩の花
夜半国境を越て支那領に入る。
此日暑きこと日本内地と異ならず。

八月二十一日　晴
騁行依然然し時に停車場にて罷工上問題ありたるも大なる支障を生するに至らす。
午後九時、ハルピン着出迎者多数なり。十時半迄石坂氏［善次郎、浦潮派遣軍司令部附（ハルビン特務機関長）］宿舎にありて快談す。午後十一時三十分発、西行す。此日暑し。

八月二十二日　曇　微雨あり
午前六時、安連にてセメノフ［グレゴリー・M・セミョーノフ］乗車汽車と会す。
黒沢大佐［準、浦潮派遣軍司令部附（チタ特務機関長）］の訪問を受く。セメノフと会談するに至らざりしは遺憾なり。
午後九時、興安嶺に入る。山又山なるも高からず。十時過、例の堕道を過ぐ。
　音に聞く興安嶺も何のその
　　一夜に過ぐる汽車の旅哉

八月二十三日　晴
午前八時三十分、満州里に着す。
〔午前〕十時半、発車す。
　白樺の木の間を辿る汽車の旅
　　音づるものゝなきそ寂しき
　百千里行けと果なき大野原
　　人里稀に飛ぶ鳥もなし
細野旅団長［辰雄、第二一旅団長］は交代引受家屋の不備に就て不平を唱へ居れり。此日冬服を着用す。

八月二十四日　少雨后晴
午前六時、アンチビーパに着し、茲に下車準備を整ふ。
午前九時、知多着官民及コサック中隊の出迎を受く。到着時の手順甚た不可なりき。
茲に今日より西比利亜生活の第一歩に入れり。
知多は西比利亜の京都にして市街の中央を流るゝ知多川は恰も加茂川の如くして而して三面山に掩はれ森林緑翠滴らんとす。
　想はりき西比利亜原の真中に
　　京都に似たる都ありとは
午前十時過、第三師団長［大庭二郎］より当該師団の今日迄に於ける任務並に情況の変遷の大要を聴取す。要は中央部の方針に導由し、軌道外に逸せず、任務の遂行に全力を尽すに在り。
此日午後三時半に於て華氏六十五度なりき。師団司令部の交代準備に関しては、第三師団長以下の好意に依り万事整頓し心地能く受継を為し得る姿勢にあり。

八月二十五日　晴　午後降雨あり
午前九時半頃に於て第三師団長より東北部の掃蕩事情、セメノフ軍の状況等を聴取す。
午前十一時三十分、挙行のセメノフ軍、過激派軍撃退一週年観兵式に臨む。
驟雨至る時は本街道河の如く流る。

八月二十六日　朝少雨後晴
午前十一時、セメノフ軍の新指揮官及参謀長［ズブコブスキー］来訪す。
其言に曰く
　過日来バグダート方面討伐コサック軍は目下敵と接触、攻撃中なるも日本軍の後退に依り進捗せず。又該地付近は密林にして騎兵砲兵の運動に適せず。今後協力援助を乞ふ。
予は左の如く言明せり。
　適当なる好時機に於て協力するを辞せず。尚研究すべし。
右通訳鈴木訳官。
午後一時、衛生上の連絡として当司令部に派遣のセメノフ軍附二等軍医正来訪す。
午後三時三十分より大庭師団長の嚮導にて左記のものを訪問す。
　セメノフ司令部
　後貝加爾州長［セルゲイ・A・タスキン］
　知多市長［タバーチン］（留守）
　英国両大尉（米領事に邂逅す）
　米国少尉
チェック少尉は第二知多にあるも曽て来たことなしと云ふ。依て訪問せず。
今日ボルチヤに於て露国将校に汽車中拳銃を窃取せられんとせる電報ありたり。

八月二十七日　晴
昨日訪問せし諸外人答訪し来る。米領事［ロナルド・S・モーリス］も然り。
此日初めて露式浴場に行く。
夕刻、第三師団長以下諸幕僚部長等を招待し会食す。
松本砲兵大隊汽車輸送中擬似コレラ患者一発生の報あり。

八月二十八日　晴　華氏七十度
午前十一時、ブリヤート族頭領来訪し左の言あり。
　西比利亜には過激主義放蔓しカザック兵と雖とも何時蜂起するやもしれず。然れともブリヤート族人は決して右様のことなく若し右蜂起の場合ありとせばブリヤト人は団結して之に当らんとす。其時には何なりと用命せられたし。
予は右に対し
　右様の場合ありとせば協力を望むことあるべし。
要するにブリヤート族は我帝国に対し好意を有するものゝ如く解せらるゝも果して如何にや。通訳秋草中尉。
午後四時、3.D長と共に米領事を訪問したるも留守なりき。

八月二十九日　晴
今日初めて市中を自働車にて見物す。周囲の光景頗る佳にして殊に白樺の森林中の散跚（策）騎乗極めて可なるを想はしむ。帰途古沢領事［幸吉、チタ副領事］住宅に立寄り喫茶の后、帰宿す。
河西大佐来訪。トロックに機関銃搭載巡視必要談あり。
（挿入　午後井上砲兵少佐［九郎、野砲兵第五連隊第二大隊長］申告に来り。安連駅長に対する処置を略述せり）

八月三十日　払暁前微雨后晴　正午七十度
モーリス大使今明日中来知。第三師団長訪問の通知ありたり。
此夕井上砲兵大隊の安連に於ける鉄道従業員威嚇の詳報に接す。同少佐は出発前の訓示を承知し居らず。驚き入りたる次第なり。

八月三十一日　晴　日中七十度
此日天長節に就き、差支なきものは事務を執るに及ばざる旨一般に達せり。
昨夜セメノフ軍参謀長、鳥居翻訳官［忠恕、外務省翻訳官］同行、3.D長を訪ひ、今朝三時旧露帝室親王、内親王、大官等公人の死体を汽車にて輸送に来るを以て、過派に覚られざる為め日本自働車にて寺院に送りたしと。3.D長之を快諾し午前三時、三輌の自働車にてチタ駅より寺院迫送り届けたり。蓋し此屍体はエカテリンブルグ撤退の際持来りたるものにして皇帝並に皇后の屍体は到底見当らざりしと云ふ。一時隆盛を極め天下に覇たりしロマノフ朝も実に悲惨の極に達せりと云ふべし。
〔注　欄外に✓あり〕

九月一日　晴

午後二時、米国陸軍少将Graves［ウィリアム・S・グレーブス、アメリカ派遣軍司令官］来部。3.Dと同務上に於て左の要旨の談話ありたり。

オムスク政府は薄弱にして若し敵がトボル河を〔渡〕るに至れば顚覆の外なかるべし。軍隊に戦意なし。今後の形勢頗る悲観すべきなりと。

午後三時三十分、米大使Morrisを3.D長と共に汽車中に問ふ。彼の談話中、特に銘記すべきこと左の如し。

一、鉄道守備に米兵を加用すること。

二、オムスク方面の依頼不可能のこと。

三、セメノフ軍の行動不可なること。且日本の陰に之を擁護しあることに関するイヤ味のこと。

四、ダウリヤに配兵せざることの不審。

五、セメノフ軍隊の虚〔虐〕殺行為。

六、セメノフの小人物たること。

七、鉄道守備に関する任務の見解を毎東京に於て決定すること。

右要旨は之を総長［上原勇作、参謀総長］、大臣［田中義一、陸軍大臣］、軍司令官に宛て3.D、5.D長二人の名を以て報告（電信）し置けり。

満州里に残置しあるA及Kの二兵卒は、共に悪性虎列刺に決定したり。噫。

満州里の交代に関する細野少将の詳細報告に接す。亦□□の発祥〔症〕困たものなり。

九月二日　払暁前降雨　後時々曇る

本日初めて家庭通信に接す。

22i留守隊のことに就て書記報告あるも未た其要を委さず。留守司令部は何故に速に幕僚を派遣せざりしや。理事一人の出張は其処置緩漫〔慢〕なりと云ふべし。

又倉本週番中尉の処置其馬鹿さ加減に至りては言語の外に在り。青年将校の指導亦難哉、噫。

九月三日　晴

二、三日前より咽喉部風邪の気味にて今朝、崎田軍医の診察を受けたるも、体温平常の如く大したることなし。

九月四日　曇後少雨続く　六十八度

午前九時三十分、セメノフ中将［グレゴリー・M・セミョーノフの叔父］及参謀長を招待してアルグン河谷の情況を聴取す。中将は頻りに日本兵の赴援を請求せり。

同時右参謀長は、ダウリヤに於ける昨三日の富陛阿［富陛額］将軍射殺に関する電報を通牒せり。之に依れば同将軍の反逆に依り、之を捕獲せんとせしより遂に戦闘を開始するに至りしが如し。

午後五時半、東西仏教統一官長第八代バンジドハムバラム来訪す。ブリヤード族会頭も同行あり。単に敬意を表するに止れり。

今日は微雨粛々感慨を催す。出きらす。

筒煙見ゆるひもなし矢叫の
声も聴へじ　いとゞ寂しき

九月五日　晴　前十時　六十三度

午後四時半、中将セメノフの代理来り。ネルチエンスキザオード方面に於て3.Kの半部叛逆を為し人心不穏のことを陳述し援兵を要求せり。故に不取敢満州里及ネルチンスキーより準備出来次第支援隊を派遣することを言明せり。

午後七時半、中将セメノフ来り。シルカ河谷の不穏状態を通報せり。

九月六日　晴

午前九時、緒方少将［多賀雄、第九旅団長］来知す。一般の情況を知らせたり。

オムスク方面の形勢容易ならざる為め可成早く任地に赴くべく話し置けり。

午後十時三十分、軍参謀長よりダウリヤに一部隊派遣――、電報あり。対米対露と云ふ。其真相果して如何。只去三日の露軍側の騒擾に恐畏したるにあらざるなきか。兵数不足の今日誠に困たものなり。

午後十一時過英大佐エリオット、チタ通過したるも中谷参謀［勘作、第五師団司令部参謀］をして名刺を伝へしめ置きたるのみ。

九月七日　晴　朝霧深し
午後三時、英大尉レーナ氏、第三師団長来訪、左の要求あり。
　ノックス少将［アルフレッド・ノックス］よりの命令に曰く、ウヰルフネー付近には過激派の陰〔隠〕匿せる兵器弾薬沢山あり。日本軍の協力により之を探し出し置くべし。
依て予は直に騎馬、第一知多へ行き緒方少将に右の赴を伝へ応分の協力を為すべきを命せり。
此日初めて松山事件の詳報来る。之に依り当時の聯隊長大隊長等の本人に対する指導監督の甚た不可なりしを知るゝ。是れ然れども、今日にありては已に五日の菊十日の菖蒲〔六日の菖蒲十日の菊〕に過ぎざるのみ。

九月八日　晴
此日中村大隊（二中隊）をスレテンスクに急派せり。蓋しシルカ河水運の保護と該水運の起点を保護せんが為なればなり。

九月九日　晴
高波資源調査班員より貝加爾州東側及東南地区の偵察状態を聴取す。之に依れば該方面は概して肥沃にして大軍の陣地占領に必しも不可なるなきが如し。而して寡を以て衆に当るには貝加爾湖とキャフタ間を適当とするが如し。然れとも此線は庫倫方面を目前に開放するを以て一考を要すべし。此夕高波と会食す。

九月十日　晴
此朝オムスク軍の有利なる電報に接す。
午後二時半、当地官民二百二十名を招待して宴会を催す。3.D長及予の挨拶あり。次てセメノフ中将の謝詞あり。極めて盛会なりき。相も変らず青年将校相当官の失望嚬筬に値す。困たものなり。又露人の行儀も感心せぬもの多し。要するに彼らは餓者の水に対するが如し。矢張西比利亜式なりき。
今夕満月皎し転て旅情に不堪。
　西比利亜の荒野を照らす月影も
　都大路に変らさりけり

今日、歩11i長［本庄繁］来り。将卒元気時盛皆々今度の討伐に従へ度き旨申居けり。
　兵士が事安れかしと剣太刀
　磨く心根の勇ましき哉

九月十一日　朝霧深し　前八時六十五度
午前九時、細野旅団長来知。討伐に関する打合を為したり。
此日松山分会員曹長本田八太郎と称するものより丁種勤務演習の際、与へたる訓示の一句「在郷将校の志操堅確ならんか、下士以下の統一易したる云々」は如何にも下士以下を侮辱せるものなり、今日の将校彼等台ぶ今日の下士以下は昔日の其にあらず云々とあり。蓋しデモクラシー主義者の誤解より生すものならん。之を陸軍省及留守司令官［上田太郎、第五師団留守隊司令官］に送付したり。世の中も随分六ヶしきものとなれり。

九月十二日　少雨
午前九時三十分、今田少佐［荘一、歩兵第四二連隊第一大隊長］より砲兵小隊損害の報あり。元来砲兵小隊に歩兵一小隊を付して派遣するが如きは大に考慮を要すべき所なりき。然れども事情茲に出たるものは守備歩兵方の寡少に固らずんばあらず。
基督教青年会慰問部幹事菊池愛二なるもの九月七日付郵便を以て3.D長に送りたる手紙に左記要旨のことあり。実に困たものなり。
　植民地の大発展を為さゞるべからす。
　朝鮮を君主的の独立を為さしむるを要す。
　印度交跡支那馬来ヒリッピンを解放せよ。
（欄外）此日戦死者のあるを聞きて
　君の為めきえにし人の音信を
　聞く親人の心いかにぞ

九月十三日　晴
高柳少将［保太郎、浦潮派遣軍司令部参謀］来知し、オムスク方面の観察談あり。

此日モコーチャ方面と連絡する為め、織田少佐［恭造、第一一連隊第一大隊長］の指揮する歩兵二中隊工兵二小隊を急派す。夜半十二時発車す。

九月十四日　晴

高柳少将出発の際、稲垣中将宛打電封書受領、開封して正午発送す。

九月十五日　晴　前十一時六十三度

午前十時頃、参謀長［二子石官太郎］は3.D参謀長［奥村拓治］に左の要旨を内談せる筈なり。

今月下旬の討伐に関し、知多兵力少きに過ぐるは貴官の諒解せらるゝが如し。已に貴官の諒解あるものとせば貴師団より5.Dに協力する為め、当地に一部を残置するの必要を具申せられて如何。

午後五時3.D長を訪問す。3.D長曰く、

討伐協力は決して辞せず。心配することなく注文ありたし。今日、貴官に示したる如く、軍司令官に5.Dの兵力不足に関する意見具申を為し置きたく云々。

実際上、予の直下にある部隊は歩兵七大隊半に過ぎず、而も一中隊百四十余人のものを以て七百里の鉄道保護、治安の維持を為し、他方にはバグダスカヤー付近に於ける過軍の根拠を掃蕩せんとす。果して成効すべきや、否、大に疑はるゝ所なり。況んや知多は当師団の根拠地一朝兇徒の蜂起あらんか、列国に対しては甚だ不面目なり。故に徹底的掃蕩を為さんとせば、兵力甚た寡弱なるを感するなり。若し3.Dの一部を知多に残置するを得ば、此目的を達するを得るに至らん。

〔注　欄外に✓あり〕

九月十六日　晴　前九時六十二度

午後九時半、後宮参謀［淳、第五師団司令部参謀］偵察終りて帰還す。其労察するに余りあり。

今夜通訳官と会食す。

九月十七日　晴　前八時三十分　六十一度

午後二時、黒沢大佐来部。大庭師団長の同席の前に於て、先達浦塩行に関する結果を内談せり。其大要左の如し。

一、アタマンセメノフのみアタマンの長となりたること。

二、黒龍方面にて歓迎せられたること。

三、ロザノフと意志の疎通せしこと。

四、オムスク政府に反意を有せさる言明のこと。

五、奉天訪問は他の意志なきこと。

六、対米に就て稲垣等より注意ありしこと。

等なりき。

今夜、両師団長の名を以てセメノフアタマン一行を将校倶楽部に招待せり。相互打開け話しもありて成効なりき。

此日午後、軍司令官より3.Dの歩兵一大半を今月末迄知多に残置して差支なき電報ありたるを以て、師団は今回の討伐に於て大に好都合となり。益々抜本的打撃を加へん為め、第十一聯隊の六中隊をシルカ河谷に派遣することとせり。

〔注　欄外に✓あり〕

九月十八日　晴

ブシュレー附近に遺棄せし死体発見の報告（織田少佐より）ありて安心せり。

昨日午前、井上砲兵少佐ネルチンスクより来り。一般情況（ブシュレー戦）を話せり。要するに敵情を軽視し宿営地の撰定並に警戒の不充分なるに基因するものと判断せらる。乍併各人の戦闘動作に至りては実に勇敢にして間然すべき所なし。

午後二時三十分、アタマンセメノフを訪ふ。快感ありたり。彼の風息は当時の那翁を確想せしむ。前途有嘱云々。

午後九時三十分、音楽演奏会に出席し中途帰る。

九月十九日　晴　前八時　六十一度

午前十時三十分、セメノフ中将来部。討伐に関する打合を為す。曽て両参謀長内議の件に就ては異存なし。彼等も今度は大分奮発するものゝ如く案せらる。

九月二十日　晴

午前十一時、3.D長帰途に就く。

一、露国の一中隊整列、我軍楽隊出場す。居留民、露国文武官、我将校皆見送る。
二、3.D長は先づ露軍の前を閲兵、而して健康を祝すを述べ次に凡ての文武官に握手の挨拶あり。
三、居留民に挨拶あり。
四、陛下の御稜威に依りて任務を果したりとて、3.Dの将校と共に主唱万歳三唱。
五、露将校、文官等に挨拶して茲にウラーを唱へ、
六、乗車にて分袂す。
此時同乗工兵中（小）隊、車前に整列して到着の吹奏之を迎へたり。要は順序正しく予定して行ふにあらざれば整然たるを得ざりき。
此日英将校来り。ベリョゾフカの状況を咄せり。
〔注　欄外に✓あり〕

九月二十一日　晴　正午五十七度
シルカ河谷の攻撃に関する報告来る。戦死四を出したるは遺憾なり。何故に第一線に露軍を使用せざりしや。
午後九時、戦死の報を聞きて遺憾に想へたるも、其後の報告には負傷者なりと。要は電文の不明了〔瞭〕にあり。

九月二十二日　晴　正午五十七度
此日、鳥居翻訳官及黒沢大佐を問ふ。共に当方面の大勢に就て聴く所ありたり。

九月廿三日　晴　前五十七度
午後二時、米国武官Debudceur中尉及仝領事来部。同武官は今夕出発、帰米のことを告げたり。本人に在任中の所感を聞きたるも何等話す所なかりき。即オムスク方面の情況、後貝加爾州の今後の趨向等に就て語る所なかりき。啞。彼等曰く、当地方には米人は投資しても見込なし、即露人の信用、懇誠、従業の精神に欠くるを以てなりと。予はウヰルフネーより庫倫方向に鉄道敷設の噂あり、如何。彼等答て曰く、何等聞く所なし、但此鉄道の必要なることは従来聞く所にして予等も亦然りと想ふと。
午後四時半、同武官を訪問す。
午後六時、文官通訳を集めて会飲す。是軍司令部の樋口［艶之助、浦潮軍司令部陸教援］及新任通訳の為なり。
（欄外）後任者未定なりと云へり

九月廿四日　晴　前八時六十三度
午前十一時、在賣買俄〔城〕、参謀本部調査員大尉、張占鰲及恰克図副使公署秘書長路邦道両人、歩兵大尉江副濱二に伴はれ来部す。
午後六時、右両人と会食す。其節予の挨拶の大要左の如し。
今回両君の遠路態々の来訪を多とす。
今や世界の大戦戦りたるも今後彼等の戟先は一斉に東洋に向はんとしつゝあり。換言すれば黄色人種対白皙人種の争なり。中華民国と日本帝国は同種同文なり。更に能く提携握手し能く団結協力して之に当らざるべからず。即ち今後益々日支親善を増進せざるべからす。此際両君が遠路を遠しとせず来知せられ我軍隊其他の状況を伺はれたるは予の最も欣快とする所なり。仍て茲に中華民国の繁栄と両君の健康を祝する為めに乾杯せんとす。
此夜半、帝国軍艦ブリヤート、スレーテンスクに着す。快哉。

九月廿五日　晴　前八時六十三度
午前十一時、アタマンセメノフ来訪し、戦場へ向ての門出を祝する為めに英種の馬一頭を贈りたり。
午後十時、汽車中に寝る。

九月廿六日　晴
午前六時、知多駅発スレーテンスクに向ふ。
セメノフ中将、ズブコブスキー参謀長等之に同行せり。
午前十一時、ウルリヤ駅に於て大学校の広瀬［猛］、大江［亮一］に会しブリヤード艦遡航中の経過の大要を知るを得たり。
午後一時三十分、列車中にてセ軍の午餐を受けたり。

汽関に故障ありたる為め速力遅く、遂に夜零時半スレーテンスクに着す。

九月廿七日　晴

午前九時下車し、守備隊一隅の家屋に入る。

スレーテンスクは本市街右岸にありて、山を控ひ一般の風量佳なり。水量多く航運の利大なり。

二十五日付本庄の手紙を受領す。

九月廿八日　晴

バグダットスカヤー攻撃進捗預定の如し。

九月二十九日　晴　夕方少雨あり

モゴチヤとの通信杜絶にて、已に十日に至り之を以て武装船を以てチヤッワヤに至り、連絡を取らしめたり。歩一小隊搭乗す。

午後五時、露国将校を晩餐に招待す。

此日遂に電報来らずしてバグダット方向の情況分らす。電線不長〔調〕の為なりと云ふ。

九月三十日　曇

午後一時、細野支隊との電線相通するの報ありて、シワーチ通信所はバグダット方向に盛なる砲声を聴くとの報あり。依之観れば今日も尚攻撃続行中なるが如し。

午後五時、列車に乗り明早朝知多に向はんとするに際し、細野支隊東部支援隊の悲報に接し、帰還を見合はすこととせり。

先是本庄支隊は道路険悪の為め糧秣弾薬を途中に半減し、行進を急ぎつゝあるも進出意の如くならざるが如し。而して正面の情況右の如しとせば、過軍は東部支援隊に向ひ、断然攻勢を取り南方に脱出せんと企てしにはあらざるか。又該支隊の戦況意の如くならざるに乗じ、彼は更に転して本庄支隊に向はんとするにあらざるなきか。今田支援隊は彼の陥穽に引込まるゝにあらざるなきか。若し此攻撃にして水泡に帰せば、討伐各部隊と四分五裂或は潰乱の運命に陥るかも知らず。

想ふて茲に至れば、預め之が収拾の道を備せざるべからす。即3.Dの3.Yの一大隊半を独断を以て使用するに決し、之を当地に招致命令を発したり。

又モゴチヤ守備隊との連絡尚未た復旧するに到らずして71〔71i〕長、土人の報として伝ふる所に依れば糧食欠乏の為め全滅せりと。

右の如き、各方面の状況なるを以て終夜安眠することなく遂に夜を徹するに至れり。

十月一日　晴

此日何等の報告に接せす。益々煩悶を加ふるのみ。但今田支隊の進出、本庄支隊との連絡を想像し得らへたり。

十月二日　晴

セ軍側の報に依り、バグダット占領のことを知りたるも未た確信するに至らす。

連絡の為め騎兵半中隊を急行せしめたり。

十月三日　晴

今田支援隊の勝報に接し、茲に始めてバグダトスカヤ占領の確実なるを知るを得たり。

又夜半細野支隊の報告来り。大勢を了知するを得たり。

列車中にて露将校の招待に依り午餐を共にす。

十月四日　晴

本庄支隊の勝報並に今田、細野支隊の報告到着し、茲に本討伐の終局並に成果を知るを得たり。

帰知の為め、午後五時搭車す。

十月五日　晴

午前二時、スレーテンスク発車。

露国側と午餐を共にす。

午後四時四十分、知多着。

十月六日　晴
Ⅲ/51iスレーテンスク発帰還の途に就く。
英大尉レナーを午餐に招待す。上機嫌なりき。

十月七日　晴
午前七時十五分、加藤大使［恒忠、特命全権大使］着知、之を出迎ふ。同大使の来訪あり。
古沢邸にて鳥居、古沢両主人にて午餐あり。
午後六時、大使及アタマンセメノフを招待す。
旧姓徳重、金子六蔵氏［鉄道局参事］、大使と同行。久〻にて面会せり。

十月八日　晴　稍〻曇気時風あり
〔注　記述なし〕

十月九日　晴
屋外零点下三度。

十月十日　晴
屋外零点下五度。

十月十一日　晴　後微雪降る
日中屋外零点下三度にして風強く寒し。
英国将校来訪す。

十月十二日　晴
71iの行動に就て万事類欠を来し、甚た心痛の至なり。特に宇多大隊に於て然りとす。
英国将校答訪す。

十月十三日　晴
軍直属部隊長を集め会食す。先立黒沢大佐の講話ありて露国特に後貝加爾の事情に就て説明する所あり。

十月十四日　晴
近頃の天候は、午前は概して静穏なるも午後は風強く砂塵を飛ばす。
午後四時、支那連絡将校張大佐の訪問を受く。
彼は我士官学校二十一期の出身なり。

十月十五日　晴
夜半雪降り四面皚〻銀世界を呈す。

十月十六日　晴　暖かし
午前五時四十五分、大井軍司令官［成元、浦潮派遣軍司令官］を列車に訪問す。
面謁せず。
此日、貝加爾湖附近地形偵察、植田大佐［謙吉、浦潮派遣軍司令部参謀］一行来知す。

十月十七日　晴
〔注　記述なし〕

十月十八日　晴　稍曇
細野少将を招致到着し、戦況の詳細を説明す。之に依ればバグダトスカヤの攻撃にして本庄及今田両支隊の進出預定、遅くも廿九日晩なりせば其効果、更に大なりしならん。

十月十九日　晴　風寒し
午前八時三十分より第一第二チタ直属部隊を巡視す。特別部、司令部、本部の不仕末を知るを得たり。
午後二時、士官学校主催の凱旋祝賀会に出席。アタマンも来会す。

十月二十日　晴
午前九時出発、ペスチャンカ方面北東部隊を巡視す。冬営設備中にして今月末迄には完成の預定なり。
昨十九日及同日を以て各部隊の巡視を了る。歩兵隊は将校以下総員を集め左の要旨を述べたり。
　先日大討伐の際の労苦を多とす。
　将校以下の奮闘に依り大成果を得たり。
　今後尚より以上の場合に遭遇することあるを覚悟し身心の鍛錬に努むべし。
騎兵及砲工兵に対しては、兵卒作業現在員の寡少の為め、将校丈を集めて右同様のことを述べ、之を部下に伝ふべく命じたり。
一昨夜、香取旅館に過激派の暗殺団投宿、昨朝捕縛せられたりと。（古沢領事の談）仝行三十人位の如し、爆弾其他の兵器を有せり。
午後六時、支那大尉張天驥より将校倶楽部に招待を受けたり。

十月二十一日　晴
無線電信にて寺内伯［正毅、前内閣総理大臣］の薨去並に明石総督［元二郎、台湾総督］危篤の報に接す。
午后四時、米国領事及グラーブス少佐来訪す。グラーブス曰く、鉄道全部は日本軍隊の掌中にあるにあらざれば運行意の如くならずと。蓋し御世事〔辞〕ならん。

十月二十二日　晴
午前九時、軍司令官来着。預定の如く進捗す。
午後六時三十分、将校倶楽部に於て軍司令官の招宴あり。彼我の挨拶了りたる后、牧田軍医監［太、第五師団司令部軍医部長］、突如卓上演習を始めんとして司令官の叱咤を受け中止せり。蓋し同監は、司令官は第五師団の為め戦勝祝杯を挙けしに拘らず、セ軍の為め何等の言及なきを以て自ら僭越を省みす之を為さんとせるものなり。洲長補佐官は此言及なき為めホークを投し席を蹴て退出せりと云ふ。
果して然りしや否。

十月二十三日　晴
午前八時出発、ペスチャンカに行く。
午後六時、軍司令官一行を食堂に招待す。

十月廿四日　晴
午前九時より第一知多へ行く。
午後零時半、セメノフの招宴会（劇場）へ出席盛大なりき。
午後六時、ワゴンにて軍司令官と食会す。主なる談話の要点左の如し。
一、帝国軍隊の価値（有形無形凡ての点）を世界に紹介することに注意せざるべからす。強き一方のみにては不可なり。又目前の利実に眩惑すべからず。
二、軍直属部隊の改善、軍令系統。
三、支那軍の騁〔驕〕慢。
四、セメノフの自重を要する件。
五、兵力配置上の不足。
六、止むを得ざる時は蹶起して大打撃を加ふること。
七、鉄道隊を地区司令官に配属すること。
八、軍直属部隊の不軍紀。
九、売買酒保の取締。
十、指揮官の前進力如何。
十一、22iを返すこと、即9iの問題預期の如く解決せる后。
十二、帝国は決して一方に偏することなく厳む中立の位置に立つべく、換言すればオムスク政府斃れ他の有力なる、より以上の政府立つものとすればそれにて可なり。即何時にも政策に余地ある如く渉内事項を処理せんとす。決して或一部に執着するものにあらざることを承知しあらざるべからず。
十三、ハルピン以西の特務機関は動もすれば其部面のものに捉はれ、其部局の人と為る傾向あり。従て前項の嗣后の活躍を狭める模様あるを感す。

十月廿五日　晴
昨日来、米国よりオムスク政府に宛、輸送中の小銃五万挺知多に到着せり。セ軍側はオムスクより其内一万五千挺の交付命令に接しあるを以て茲に下車せしめん

とし、掩護者米中尉は之を拒み、遂に兵力に訴へんとする情況となれり。依て予は両者の中間に立ち、両方の諒解を得る手続終了迄、汽車を止めしめたるも午後六時（露米時間）に至るも何等の追電なき為め、之を発車することとなりたるに不被拘、午後九時に至るも露側は汽関車の故障の理由の為め、未た発するに至らざりき。

比に右の如く承諾済なるに不被拘発車せざる所以は、露の感情に基くものなるも受としては信用を害せられ、将来に影響するもの少からず、大に考慮を要すべきものなり。

午後四時三十分、軍司令官発車す。

軍司令官に直接話せし事項、左の如し。

一、22i交代に関する件。

二、軍直属部隊を師団に付するを要するものあり。

三、飛行機、伝書鳩、無線電信等を付する必要。

甲騎兵聯隊のことは話さず。

四、感状を申立ること。

五、傭人に預後備兵使用の件。

六、ダウリヤ守備隊撤去の件。

七、ボルジヤの守備を本月撤去の件。

〔注　欄外に✓あり〕

十月二十六日　晴

午後四時半、セ軍参謀長及作戦課長を招待して、ネルチンスキザオード方面の情況を聴取り、今後の砲兵の資料参考とせり。

十月二十七日　晴

午前十時、活仏及亜細亜師団長来訪す。予の左の要旨を話せり。

一、教育を盛にし、実力を培養するにあらざれば何事も不可能にして空論に過ぎす。

二、大勢大局に着眼すべし。一小部分に齷齪すべからず。

三、蒙古は吾人と同人種にして東洋に大なる関係を有す。共に協同以て東洋の平和に努めんとす。

午前十一時過、海軍大尉郡司成忠、オムスク行の途次来訪す。

午後一時、支那大佐趙天驥及領事管尚平来訪す。

次て基督教青年会慰問部幹事長河合亀輔来訪す。

午後一時三十分より各部隊長を集め警備上の関する注意を与ふ。

十月二十八日　晴　稍曇

先日の降雪は全部解け四方啻枯木の森山を見るのみ。払暁頃屋内零点下十度内外なり。

十月二十九日　風強く曇

午後二時、屋外に於て零点下十度なり。

昨夜来微雪あり。

十月三十日　晴

今日装甲列車長及支那民国居留民会長来訪す。蓋し明天長節の招待を受けたればなり。

田家の早桜の御題に就て

いかにせん荒野の里の冬籠
雪間の桜を看る由もなし

〔注　欄外に✓あり〕

十月三十一日　晴

本日天長の佳辰に付、与国側約百人を招待し祝宴を張る（正午）。

午後三時、居留民会開催の余興会に出席す。五十円寄付す。

午後八時、黒沢邸開催の茶会に行く。

十一月一日　晴

風強くして紅塵を揚ること万丈。

未た左程に寒気を覚えず。

十一月二日　晴
一昨日来司令部、宿営中隊に流行性感冒発生。伝播烈し。

十一月三日　晴
先帝陛下の天長節。陛下崩御以来已に八星霜なり。嗚呼。
午後三時、セメノフ中将を訪問し、第八師団長と卓を同ふして会食す。
此日午前十時より警報演習施行に付き実視の為め、ペスチヤンカの鞍部に至る。

十一月四日　晴
5.A長［藤井清水］来部。ベリヨゾフカ部隊に関する状況報告あり。

十一月五日　晴
近頃最低温度二十二度に下ることあり。

十一月六日　晴
此日22i復帰の通報あり。

十一月七日　晴
西班牙中佐来知す。

十一月八日　晴
午後六時、西班牙ェレラ中佐を主賓に会食す。

十一月九日　晴
午後三時に於て零点下二十五度なり。

十一月十日　晴
午前九時、歩兵大佐川嶋義之［参謀本部第八課長］帰京に付、着任以来の所感として左の件を参謀総長に伝ふべく依頼せり。

一、対極東政策方針として、三州の維持は可なるも単に武力のみにては不可なり。州民に生活上の安定を与へざるべからす。多少物資の輸入を必要とす。過軍中生活難より加入せるもの過半あり。

二、右の如くにして而して三州の自治的発展を促す必要あり。

三、貧民救邱の必要あり。

四、支那主権の擁護に就ては十分の注意を要す。張天驥の滞知は蓋し之が為なり。

張はセメノフのブリヤート族の操縦及対蒙古政策に就ては飛耳張目の状態にあり。

五、西比利亜経済援助会の機関を陸軍官憲の下にあらしむるを有利とす。

六、セ軍改善の必要あり。而して今日の状況に在りてはコサックを除外して何物をも為す能はす。従てセ軍を援助するは将来益々緊要の度を加ふべし。

地方に依りては過軍よりもセ軍を怖るゝものあり。蓋し略奪其他不良行為は時としてセ軍以上に出ることあればなり。

セメノフは対米、英、等の観念頗る緩和し来りしが如し。且末派にして彼に正肯を欠くを遺憾とす。セメノフの対蒙関係は果して根本的に断念せしや否疑なき能はす。彼の最後の退路は彼処にあるにあらざるか。

七、編成上に就て。

自働車、伝書鳩、無線電信、飛行機の必要あり。

騎兵甲聯隊を附するを有利とす。

機関銃、狙撃砲を多く附するを可とす。

八、西部後貝加爾州に軽便鉄道を布設するを有利とす。セ軍に交渉したるも材料なきが如し。

九、オムスク方面の情況如何に依り、当師団主力を西方に集中せんとするに当り、西部アムール線を放棄せば、大約七大隊の歩兵を集め得べし。状況右を要求するに至れば、アムール線の大部を放棄するを至当とせん。

十、軍隊に不良思想の感染は目下覆ふる所なし。

十一、兵力の不足を補ふ為め傭人等は凡て預後備軍人を以て充つるを可とす。

十一月十一日　晴
現時、ベリョゾフカ、師団司令部内、及コサック兵営に流行性寒冒発生。蔓延尚未た止らす。ベリョゾフカ方面は悪性なるが如く、今日迄既に特務会長以下七名の死者を出すに至りしは甚た遺憾とする所なり。要は気候変化の際、各人衛生の不注意に基因するものなれば、来春には充分の摂生を為さしむる必要あるべし。為置要すれば軍医部をして巡監せしむるを可とせん。
本日アンチピーパ病院の給養状態を視察せしめたり。蓋し同病院の該件に関し甚た不評判なりしを以てなり。中村主計正［致夫、司令部経理部員］復命して曰く、細部に於て不充分点往々ありと。非難の点左の如し。
給養の不足不良。
有菌者と無菌者と同居（結核者）。
食器を結核患者の分と同洗。

十一月十二日　晴　曇
早朝、古嶋中将よりの贈物鯛及海老到着せしを以て知己に分配し且夕刻会食を催す。会するもの十六人なりき。

十一月十三日　晴
古沢領事宅の晩餐に出席す。

十一月十四日　晴
植田大佐一行帰る。会食す。
加藤中佐［惣次郎、第七一連隊長］7i［7li］の報告として来知す。

十一月十五日　晴　午後四時零下十度
アルグン上流の過軍に対し、セ軍より出兵要求ありたるも両三日の后に於てすべきを答へ置けり。蓋し目下の状況は何時イルクツク方面に増兵の必要生するあるを虞るればなり。
第一知多停車場のウイルフネー行荷物宰領者に対する行為に関し注意を与へたり。

十一月十六日　曇
午前九時、人事局長［竹上常三郎］宛、緒方の帰任に畑［英太郎、陸軍省軍事課長］を充当せられ度を打電す。
軍司令官に州内に物資の輸入及貨幣の調節に関する意見を電報にて具申す。
午後三時三十分、7i［7li］加藤中佐にネルチンスク東南方の過軍討伐時の注意を与ふ。

十一月十七日　晴
午後六時、植田大佐と会食す。其際談話の要点左の如し。
一、軽便輸送のこと。
二、兵力不足のこと。
三、物資不足、経済状態のこと。
四、当地方面にてはセメノフの第一人物ならんとのこと。
五、特種部隊配属の必要。
六、軍直属部隊の不能鱈。
午後四時に出発すべかりし今田支隊の列車は、遂に十一時過となれり。蓋し停車場司令部員の努力、常に足らざるに基因するものならん。

十一月十八日　晴
午後一時三十分、仏の通信大尉来部す。

十一月十九日　晴
午前十一時、仏のミッシャ大尉を訪問す。
午後一時、乗馬にてペスチャンカに至りA、K、P本部を訪ふ。別に異りたることなし。午後四時十五分帰部す。

十一月二十日　晴
建川［美次、留守第一〇師団司令官］の手紙来る。大討伐及小銃問題に関する東京方面の聞き書きありし。

十一月二十一日　晴
昨夜十二時頃、兵站部の主計及通使将校二人、センクトに至り乱暴行為ありたるの通報に接す。
午後五時半、11i長の為会食を催す。

十一月二十二日　晴
午前十一時、ノックス少将を第一知多列車内に訪ふ。談話の要点左の如し。
一、オムスク方面の情況不明なるも九千位捕虜となりたる如し。
二、オビ河付近は停止に可ならんも結氷せば然らず。
三、イルクツクに日本兵増派の要あり。
午後二時、答訪の為め来部せり。談話の要点左の如し。
一、露民生活難の件。
二、日本軍の過軍東漸抑止点。
三、イルクツク日本兵増加のこと。
午後五時半、軍経理長河内主計監［暁］及陸軍省衛生課長飯島軍医長［茂、陸軍省医事課長］来知に付、会食す。

十一月二十三日　晴
自働車隊増加配属の件、電報具申す。

十一月二十四日　晴
川合［与三郎］獣医部長の補充馬に関する件に就き、小言的諭示を為したり。
午後三時過、英代表武官来部す。
午後五時三十分より仏国両大尉及活仏の中尉を晩餐に招待す。彼等は食後対西比利亜に関する吾人の感想を聴かんと力めたるが如し。即現コルチヤック政府及セメノフに関する吾人の考を知らんとするにありたり。彼等曰く、
コルチヤックは度量狭小なり。
コルチックに代はるべきものは夫れセメノフかと両人更に諧言せり。
セ軍の悪口を陰にほのめかせり。
チェック軍の帰心矢の如きこと。
オムスク軍の撤退。
食後の談話永くして、午後十一時近くに帰途に就きたり。

十一月廿五日　晴　風強し
午前十一時、仏将校と撮影す。
英国オムスク政務官来部す。

十一月廿六日　晴
元オムスク政府外務次官、現政務官来訪す。
22i長来部隊現報告を為す。

十一月廿七日　晴
午後三時三十分、42i今田少佐帰還復命す。要は単に行軍して目的点に到りしに過ぎずして、一発の弾丸お［を］も費さゞりき。併し大体に於て概ね適当の行動と認むる旨言渡し置けり。稍敏活を欠く嫌あり。

十一月廿八日　晴
午前十時三十分、三浦大隊長［明、歩兵第一一連隊第二大隊長］の情況報告を聴き左のことを言渡せり。
先般の討伐は可なり大規模のものなりしに拘らず、其目的を達するに至らざりし。
十日晩クルーレに至りし清水大隊が何故に三里隔てしオノン、ボルヂヤの敵を攻撃せざりしや、支隊長はオクールイにありしも、此如き時こそ即独断専行を要する時なりしなり。将来の為め一言し置く。

十一月廿九日　晴
昨今稍暖かなり。

十一月三十日　晴
露国中将ニコハーブ来訪す。同中将は主として経済事業に鞅掌せるものなり。談

話の要領も亦之に出でずして産業発展の必要を説けり。予は終に於て該事業の為めには為し得る丈け協力すべきを以てしたり。

十二月壱日　晴

午後五時半、英大尉Walker et Laisemitzを招待し晩餐を共にす。

第一知多に騎行し、鉄道中隊長及守備歩兵中隊長に注意を与へたり。

十二月二日　晴

午後五時、森、今村の起業家一行を晩餐に招待し、食後予は次の意味を話したり。

堅実なる基礎上に起業せられたし。

目前の利を避け希望を永久未来に置かれたし。

各位の歩調を一にして露人をして疑惑なからしむること肝要なり。

十二月三日　晴　稍曇風強し

徒歩運動の序を以て黒沢大佐方に立寄る。

オムスク方面の情況、稍緩和せるが如し。

十二月四日　晴

午前九時より各守備地区司令官の会同を行ふ。緒方少将病気の為め不参。

午後六時半、会食す。

十二月五日　晴　零点下二十二度

午後一時、故林中尉の告別式に臨む。

午後七時、センクトホテルのセメノフ晩餐に出席す。初めての内明け会にて愉快なりき。

十二月六日　晴　零点下廿五度

乗馬にて22iに行き、将校以下を集めて左のことを述ぶ。

約半歳浦塩の警備に任じ、大なる不都合なかりしは大に満足する所なり。

今後は何時如何なる方面に討伐に出動するやも計らず、能く身心を鍛錬して急に応するの準備覚悟あるを要す。

将校（大隊長以上）と午食を共にし午後四時帰知す。

午後五時より明晩搭車出発に付き、部長以上と会食す。

十二月七日　晴

仏国大佐の訪問を受け直に答訪す。

午後九時三十分、搭車す。

昨夜来風気を催す。

十二月八日　晴

午前三時知多発。

午後四時二十分、ネルチンスク着。官民の出迎を受く。

此日晴天なるも頗る寒し。零点下約三十度に達す。

風気未た抜けず。

十二月九日　晴　零点下三十四度

正午、官民の歓迎宴に出席す。不相変露式にして乱酔暴舞の状ありたり。

午前午後各兵営巡視、教練の一部を視る。

午後五時半官民を招待す。

元来露国なるものは帝政時代の如く果して統一し得るものなるや。其中心人物存在するや甚た疑なき能はず。寧ろ局部毎に独立自治を為さしむるを有利得策とせざるや。一般人民の意向素質に鑑みるに旧時に於ける如き大露国の復興は前途甚た遼遠と云はさるべからす。識者大に考慮を要すへき点なりとす。

十二月十日　晴

ネルチンスク地方は概して深雪約二尺前後にして寒々しき。亦知多付近より酷し。

北進するに従ひ其度を増加す。

午前五時、ネルチンスク発。

室内寒くして華氏四十二三度、賊風不絶隙間より入る。

午後十時ジロー着、直に報告を受け了りて官民を夜餐に招待し、十二時に至る。

当地官民より招待を受けたるも植田大佐を代理として差遣す。
右の如きを以てジロー部隊は帰途に視る事に変更せり。

十二月十一日　晴
午前五時発の筈なりしも汽車故障の為、午前八時ジロー発、クセニスカヤに午後二時着、同四時発、夜十二時モゴチヤに着す。
同時、川崎辰雄〔鈴木の女婿〕入校の電報（校長より）を入手す。
日中零下三十五六度。

十二月十二日　晴
午前九時より在モゴチヤ部隊を巡視す。
午後三時、鉄道長官バルスキー氏方訪問。茶果〔菓〕の饗応を受く。
午後五時半、官民を招待す。
今夜辰雄に宛手紙を出す。

十二月十三日　晴
午前五時モゴチヤ出発、午前十時クセニスカヤ着、直に守備隊を巡視す。
守備隊の設備其他一般良好にして、従来曽て見ざる所なり。
午後一時三十分クセニスカヤ出発、午後七時稍前ジローに着す。
先覚ジロー住民より晩餐招待の電報ありたるも之を断り部長幕僚の一部出席せり。

十二月十四日　晴風稍強し
午前八時三十分よりジロー守備隊を巡視す。警備方法徹底的ならず。
午前十一時ジロー発。
午後一時ブシュレー着。守備隊長及露国大尉と昼餐を共にす。
午後二時、守備隊巡視、三時終了。
午後三時十五分出発、午後六時二十分クェンガに着す。黒瀬小隊長山口停車場司令官の訪問を受く。
午後十時屋外零点下四十二度にして寒気甚たし。

十二月十五日　晴
午前七時四十分クェンガ発、時々機関車に故障を生じ、午前八時半ストレテンスク着、直に巡視。
午前十一時、マツイブスキー少将〔セミョーノフ軍戦線総指揮官〕等と喫茶す。
午後二時ストレテンスク発、カルイムスカヤに向ふ。寒気酷烈なり。

十二月十六日　晴
正午十二時稍前、カルイムスカヤ着。
本線の運行渋滞し、三日前より東行汽車停止にありて当列車も午後七時漸く出発するを得たり。
此の如く運行の停滞は益々物資の集散を緩漫〔慢〕ならしめ、従て露人の生活上に不安を来すや大なり。困たものなり。

十二月十七日　晴
午前六時、オロワンナヤ着す。
午前八時三十分より守備隊巡視。Ⅱ/42成績甚た不良にして従来見ざる所なり。
午後零時オロワンナヤ出発す。途中過軍の鉄路に近接しある情報ありたるも何等の故障なかりき。
午後六時ボルヂヤ着す。守備隊長と会食す。

十二月十八日　晴
午前八時よりボルヂヤ守備隊巡視す。
午前十時二十五分出発。
午後三時十五分、満州里着。各国官民、支那軍隊の出迎を受く。
午後五時三十分、倶楽部にて宴会開催す。露国守備隊司令官少将は頻りに日本信頼のこと、日独露の同盟の噂を話せり。而して彼等も亦米国の忌避其他の不真面目なる援助をつぶやけり。
午後九時、開散す。
最低零点下二十七度。

十二月十九日　晴
午前八時三十分より巡視す。午後一時終了す。
旅団司令部にて昼食。
午後六時、民間の招待会に出席す。

十二月二十日　晴
午前二時、満州里出発す。
午前十一時、海拉爾着。直に巡視。午後一時終了。露支両国の将校（晄旅団長主賓）と会食す。
午後二時半、海拉爾出発す。
夜半十二時布哈図着す。

十二月二十一日　晴
午前八時より、布哈図守備隊巡視す。
午前十二時、布哈図出発。
海拉爾西方に於て先行貨車脱線の為め四時間遅延す。

十二月二十二日　晴
前記の如くなる為め、午前八時二十分満州里に着す。
午前九時、満州里出発す。
午前十一時三十分ダウリヤ着。直に守備小隊を巡視す。
午後二時三十分ダウリヤ出発す。
行途間故障頻発の為め速度遅延す。
ダウリヤ早瀬参謀長の報に依ればオロワンナヤ北方五露里に過軍約四千あり。為之バロンウンケル少将［ウンゲルン・フォン・シュテルンベルグ］は二中隊を率ゐ急行せりと。

十二月二十三日　晴
午前七時ハタブスク出発、同十時三十分オロワンナヤ着。
午前十一時四十五分オロワンナヤ出発。途中機関車に故障を生じ六時間停車す。
十二月二十四日　晴
午前一時半カルイムスカヤ着。
午前八時より守備隊巡視。九時半終了。
午前十時三十分カルイムスカヤ出発す。
午後一時半、知多着。
午後三時半、中将セメノフ、モンガルフ大佐及副官、アタマンセメノフの代理として慰問の為め、来部せり。
午後四時半、黒沢大佐来部。留守中の経過を聴き会食す。

十二月二十五日　晴
午後二時、労働新聞記者高倉寛来訪す。
午後三時セメノフ中将来部、左の要旨の談話あり。
一、イルクツクに部隊派遣に就ては日本軍隊の一鶴を同行せしめられたし。
二、ペトロブスキーザホード西南の過軍に対し、米軍の討伐を要求せんとす、如何。
右、第一に就ては考慮の后、回答せん。
第二は我守備地内、右の討伐に米軍に依頼するは承諾出来ず。露軍が米軍と協同して動作せんとするの考は旅程の関係上可なるも乍併、予は予の守備地区内、他国の主働者たるは首肯するを得ず。討伐の必要あれば日本軍主働者とならん。米軍にして之に随行せんとせば敢て拒む所にあらず。又露軍単独にて討伐せんとするは夫は固より望む所なり。
セメノフ曰く、米軍も果して討伐動作を適当に為し得るや否疑はし。
予は貴下は北清事変に於て、其価値を糾はんこと知せるにあらずや。兎も角、予は未た討伐実施の時機にあらずも少し経過を見るを可とせし。
午後五時半より今回の出張員並に留守員と会食す。

十二月廿六日　晴　最低温度零下四十度
午前十時、露国フレシチヤ中将来訪す。予の談話の要談左の如し。
日本武士は国難に際し、家を忘れ妻子を忘れ、身を忘れて一意専心国事に奔走せり。今中露国の大難来る能く此心を以て上下一致団結せば何事か不成。

東支鉄道方面は隠然一国を為すの観あり、如何。彼曰く、然り、併し今後アタマンセメノフにして大権力を得ば統一せらるゝならん。
予は七八日前満州里、海拉爾、布哈図を巡視し東行するに従ひ、露支両国軍隊間の感情次第に疎隔しあるを認めたり、如何。
彼曰く、然り。
予は相互の意思の疎通を図り、如此き事なからんを欲す。
午前十一時、セメノフ、メルリン少将来訪す。兎止めて記すべき談話なし。

十二月廿七日　晴
午後一時、アタマンセメノフ来訪す。予の旅行終了に挨拶せんが為なりし。
午後三時三十分、中将セメノフ、モンガルフ大佐、ズブコブスキー参謀長を招致し、ネルチンスキザオード日本兵撤兵に関し談合し、考慮の余地を与へて帰したり。
午後五時三十分より両軍医部長の送迎会を開催す。

十二月二十八日　晴　午後三時に於て零点下28°
午前十一時半、セメノフ司令部の外交部長来訪す。
午後六時、オムスク政府コサック省少将来訪す。

十二月二十九日　晴
午前十時、牧田軍医監の先発を見送り、且、其序を以て露将官を答訪す。
午後零時半セメノフ中将、参謀長、作戦部長、秘書突然来部。イルクツク方面の情況に関し左の要旨（アタマンの意を受け）の談話ありたり。
一、セ軍装甲車のイルクツク停車場付近進入に同意せられたきこと。
二、日本軍の急派。
三、イルクツク停車場に在る反政府軍を撤退せしむること。
右に対し予は、
一は一般の情況上適当と判断してせらるゝ動作に関しては、賛否を言明せず。
二は已に軍令済。
三は福田機関を通して其意思を伝へんとす。
右は板谷大尉の通訳なるを以て、予は乗馬運動の序を以て、黒沢大佐を訪問。同大佐より更にセメノフアタマンに伝へんことを求め置けり。

十二月三十日　晴
午前十一時半、アタマンセメノフを答訪す。
午後零時半、チェック代表武官少佐セツセキ及大尉イーハ来訪し、昨年来日本軍の努力勇敢親交等に関し述べ、並先日チェックと露との間に不祥事生起したるも日本軍の仲裁にて円満なる解決を見たるを謝し、今後帰還輸送に関しては厚情を祷る旨話せり。依りて予は
　イルクツク以東の輸送に関しては決して心配するに不及。
と答へ置けり。
午後三時、トムスク陸軍大学校長来訪す。彼は今より浦塩に行くと云へり。或は一の学究にあらざるなきや。

十二月三十一日　晴
此日忙敷、遂に乗馬運動もなさゞりき。
書類の堆積、訪問客の多き、矢張大晦日の観を呈したり。宍戸少佐も亦此日ベリヨゾフカより来知せり。
午後二時半、中将セメノフ、大佐モンガルフ来部。伊市派遣軍隊の動作に関し、アタマンの注文を質し来る。要するに彼等は兎角自己に捕はるゝ感あり。即彼等は我派遣隊の中立なるを充分了解せず、否了解するも可成我軍隊を利用せんとする噂あり。彼等悲境の今日、同情する点あるも、亦彼等の達見の足らざるを憐察せずればあらず。
此夜幕僚全部忘年会に出席外出す。予は独り酒を酌みつゝ除夜を送り、堤のをかん、持参の素麺、パイナツブル蓋し母国を連想せしめたり。戦役四度中二度の越年なりき。而して逐次戚寞を感ぜずにはあらず。
　君のため功も立てじ過きにけり
　　来ん年も亦如何に過なん
　西比利亜の大晦日とて変りなし
　　呑で喰て寝て明日を待つなり

百八の鐘も聴かすに西比利亜の
里で年越す兵士の群

在郷将校義済会の為に金百円を寄附す。即松木大佐〔直亮、陸軍省副官〕に宛て郵便為替を以て発送す。

〔注　欄外に✓あり〕

大正九年一月

元日

天気晴朗にして温かく午前八時、雑煮、屠蘇を以て頂かん。天恩を謝し、師団の武運長久を祷り、一族の隆盛を願ひつゝ朝食をとる。

午前八時五十分、無奏任官の祝賀を受け、次て高等官及判任官の祝賀を受く。

午前十時、在知多将校其他約百二十人と祝宴を開く。

正午十二時、聯合与国の将校、紳士約百三十人を招待す。席上予の挨拶の要旨。

我敬愛なる聯合与国の将校並に紳士諸君

本日は我大和民族建国二千五百八十年の第一日に当り、諸君と祝杯を挙るは、予の最も光栄とする所なり。

回顧すれば、昨年中は諸君と共に共同の目的に対し、奮励努力し多少の効果ありたるを信す。今年も亦旧に倍し同目的の為め、勇往迎〔邁〕進せんことを切望す。

茲に新年の擘〔劈〕頭に於て諸君の健康を祝する為め乾杯せんとす。

右宴会は頗る好結果を以て了りたり。時に午後二時近くなりし。

午後三時より古沢領事、鳥居翻訳官、黒沢特務機関を廻り、午後七時頗る酩酊して帰部、直に臥床す。

〔注　欄外に✓あり〕

二日　晴

午前十一時、英将校二人、昨日の礼に来る。

午後三時、黒龍線鉄道長官カチェンコ氏来訪す。

午後六時、夕食中露国婦人三名、新年祝詞述べ度来部。之に接見す。余り高尚ならざるが如きも亦悪意を蔵するものとも想はれす。

三日　晴

午前十一時半、サンピロン［サンピロウィッチ・サンピロン］来訪。ブリヤートの主脳者、囚はれあるを以て繹されんことを願ひ来りたるも、聴き置き黒沢に話すべく答へ置けり。

午後零時半、仏の両将来来訪す。

〔午後〕二時、亜細亜師団長及参謀長来訪す。

右は元日招待の答礼の為なり。

午後八時五十分、黒沢機関より電話にて左の通報あり。

在伊スキペトロフ少将［レオニード・N・スキペトロフ］、本日午後二時発、露報の要旨。

反政府との焉恨の件（首相代理）

右に対しセメノフは返電中に左のことあり。

貴重品及露軍隊を後貝加爾に撤退のこと。

伊市は日本軍、之を占領すること。

右の末項の趣旨詳ならす、詳細は後よりとあり。

一月四日　晴　日中零下二十五度

伊市及ウィルフネー南方地区の情況日々非なり。依りて軍参謀長に宛て参謀長の名を以て、左の意見を打電せり。

一、兵力を逐次西方に移すことの必要。

二、糧食弾薬の尽蔵の必要。

三、日本の態度を速に決定する必要。

西地区方面は今や、西方及南方に配慮せざるべからざることとなり、該守備司令官の苦心察するに余りあるも、彼我兵力の価値を誤認しあらざるなきことを憂ふ。既に野中［保数、歩兵第二十二連隊第三大隊長］の一大隊を以てせば如何なるものお〔を〕も駆逐し得る筈なるは従来の経験上、之を証して余りあればなり。

午後五時半より宍戸少佐を主賓として会食を催す。

一月五日　晴

暖かくして風なし。

午後零時半乗馬、川伝にてアンチピーハ病院の見舞に行き、見舞品を贈り、帰り掛に職員に左の挨拶を為したり。
目下の入院者は我師団のものゝみにして今後も亦然らん。
諸君の御世話になることを謝すると同時に、兵卒をして身体の悪き時、喜んて入院するの観念を持たしむる如くせられたし。
右は第四病院の待遇、非常に悪きを耳にしたるを以て、特に之を述べし所以なり。
午後五時半より司令部内の新年宴会を開催し福引を行ふ。会するもの約五十人なりき。

一月六日　晴　日中屋外零点下十九度
今日も誠に暖かき日なりき。
午前十一時半、第四病院長、昨日の答礼の為め来訪せるも、何等角立ちたることを話さず、只入院患者多き際には応役兵を出を辞せずと言明せるのみ。

一月七日
天気晴郎。暖かく午後三時に於て零下二十度なりき。

一月八日　晴　零下二十一度
今夕古沢方にて晩饗、帰来十時なりき。
午前十時、□□□支部長久間中佐に軍紀飛地其他に関する注意を与ふ。

一月九日　晴
午前十時半、黒沢方へ行き、対セメノフの打合を為し、ズブコブスキ少将にイルクツク派遣隊のことを話し、午後一時アタマンセメノフ方へ行き、対チェック対列強の事に関し内談す。次て午後二時より開宴。午後四時帰部す。

一月十日　晴
午前九時半、加藤大使を停車場に訪ふ。
午後五時半、加藤大使客車内にて会食し、イルクツク方面の情況並に、当知多方面の情況に関し談話を交換す。
午後八時半、帰部す。スキペトロフ支隊の武装解除に関する報ありて、諸方に交渉す。
此日寒くして零点下四十度。

一月十一日　晴　暑し
武装解除問題に関し大使と交談、大使及英国外交代表者の名を以てヂャナン［ピエール・M・ジャナン連合国総司令官兼チェコ・スロバキア民族軍司令官］に武装回復の打電を為すこととなりたり。
午後二時大使の昼餐に列席す。
午後四時アタマンセメノフ来部。武装解除問題及装甲車の米国との関係に就て談話ありたり。彼は余程神経を痛めつゝあるが如し。
日中零点下三十二度。

一月十二日　晴、曇
朝、零点下四十度。日中三十度なり。
午前十一時、仏及ヒェックの代表武官を招待し武装解除の回復、我軍用列車の纜線、貝加爾に於ける我兵の負傷に関する談判を行ふ。彼等は何れも後より回答する旨返事せり。
午後二時半、加藤大使を列車に問ふ。アタマンセメノフ同席にありて、彼とチキツヒに対し、対敵行為に出るべく話せるを以て、時機早し、ウキルフネーの状況を確め后に為すべきを注意し、彼は首肯して帰れり。
近時に於けるチキツヒ及セメノフ両軍は共に神経過敏となり、動もすれば衝突を起さん勢となり。時局の紛糾益々拡大せんとす。東洋の為め甚た心痛に堪へざる所なり。
午後十一時半、ウキルフネー交通部よりの通報には、該方面の解決柔和に了らんとするが如し云々。
右の如きを以て、愈々我師団は其任務遂行の為め、チキツク列車の暴行を阻止する目的を以て、在知多北東部隊を準備出来次第、附近各停車場に配置し以て応急の姿勢にあらしむることとせり。

一月十三日　晴　日中二十五度
午前一時半、チキツク代表武官コシエック少佐来部し、予の貝加爾州に於ける立場を言明し、武力に訴へても其非行を抑止せんことを宣告せり。此夜臥床実に午前三時三十分なりき。
午前十一時、仏国外交代表者を答訪し、コシエック少佐へ通告の件を話し同人の同意を得たり。
昨日来露国側は、チキツクに対する日本の態度に関し、大に心痛し有力者は殆んど徹夜せるものゝ如く処々に会議あり、相談あり、人心恟々たるが如きも、我師団の声明及平般を知り、今日鎮静せりと云ふ。
午後一時半、乗馬にて第一知多に至り、臨時派遣部隊の状況を視察し、午後五時帰知す。軍隊の意気軒昂稍安し。

一月十四日　晴
午前七時半、チキツク列車、第一知多に着したるも何等のことなく、直に東行せしめたり。
夕方ヂヤナン将軍の返電二回に接し、明日聯合武官会議を開くこととす。
此日稍暖かく、午後四時に於て零点下三十度なりき。
本日野中支隊の快報に接す。同支隊連日の活動及其成効は出征以来の上位にあるものなり。

一月十五日　晴
午前十一時より各国武官会同を開催し、鉄道電信に関する各国の意見を陳べ、次て予の総合的意を説明し各人の同意を得て、夫〳〵所属長官に説明上申することとせり。終了は午後五時にして、各人共本会同の趣旨に就て好感を催したるか如し。
午後六時より仏及チキツクの武官四人を招き会食す。蓋し目下の渉外問題を緩和せんとする方法に外ならずして、彼等の意志の一片を知るを得たり。

一月十六日　晴　日中零下二十五度
午前十一時、ブリヤード（ムホルシビール付近）の僧一行五人、サンピロンに伴はれ来訪。派兵を請求せり。
午後一時半、乗馬運動の序を以て6/11の氷上前哨の教練を見る。此教練の趣旨、果して何れにありしや知るを苦む。依りて中隊長に左の教示を与へたり。
一、他日貝加爾湖上の前哨を顧慮して教育すべし。
二、氷上の雪を集堆して掩体に射撃すること。
三、天幕の使用研究。
四、氷上の採暖法研究。
五、露営隊形の研究。
帰来黒沢来訪。セメノフの進退に関する大決心、換言すれば日本の援助体〔態〕度を聴く。

一月十七日　晴
チキツク軍の集団輸送、今夜其先頭到着すべきを以て露国人心恟々として避難を企画するもの等ありて不穏の形勢を呈す。依りて師団は先日の如く部隊を沿線停車場に配置す。然れとも露国軍隊は尚動揺止ます、独断を以て出動せるもの等ありて由々敷大事を醸生〔成〕せんとする勢となれり。依りて極力セ軍側を圧へると同時に、万一を顧慮してペスチャンカの部隊をも招致せり。

一月十八日　晴
午前四時四十分、チキツクの先頭装甲列車到着次第、第列車到着す。後宮参謀はコシイット少佐と第一停車場にありて、昨日仝少佐の希望条件たる予の名を以てする慰撫の通告を行ふ。彼等は何等戦闘的準備あるなく、只セ軍より迫害を受んことを恐れ、斯く厳重を要する次第なる旨語り、数十分の後、東行に就けり。
朝来外人の訪問絶間なく日没に至る。
此夜スキーペトロフ支隊武装解除撤回解決の快報に接す。
此日来訪の主なるものは外に首相、内相、デニキン軍一行、イ領事、仏武官の二回。

一月十九日　晴　日中零下二十度
時事漸く平静となり。露国民心も亦沈静せり。

一月二十日　晴
日中零下二十二度なり。

一月二十一日　晴
午前九時半、アタマンセメノフ来部し、今日迫の渉外事項に関する謝意を述べたり。予は此席に於て、左のことを述べたり。
一、貝加爾湖畔中立地帯提案の件。
二、今日迫の懸案の解決したし。
三、軍隊の改善必要なり。
四、アタマンの意思往々下に徹底せざるは遺憾なり。
五、掠奪を厳禁すべし。
六、虐殺を行ふべからす。
午後六時半乗車、七時発ベリョゾフカに向ふ。

一月二十二日　晴
午前零時十五分、インゴタ駅に於て、チキツク第一師団長に会見す。彼の談話の要領は帰還輸送を迅速ならしめたりとの事にして、一般運行状態を知悉せすして、果して師団長の技能を有するものなるや否疑はし。
午前十時半、ヒロク着。直に守備隊巡視す。該地には不可思議なる米将校三人あり。何等か企しつゝあるが如し。
午後零時稍過、ヒロク出発す。
午後六時五十分、ペトルスキザオード着、会食す。
午後七時過頃、過軍三四十ペトルスキザオード来襲、掠奪を恣にして、約一時間の后、撤退す。

一月二十三日　晴
一般に此地方は知多よりも暖にして約十度の差あり。
午前八時より守備隊巡視了りて、九時五十分発車す。
午後四時稍過、ベリョゾフカ着す。
同夜旅団長、福田大佐［彦助、浦潮派遣軍司令部附（オムスク特務機関長）］等と会食す。

一月二十四日　晴
午前八時よりウキルフネーの22i の野中大隊、次てベリョゾフカの部隊を巡視し、午後零時半終了す。
午後一時、日本将校、露国将校と会食す。
午後二時三十分より四時三十分迫ジヤナン中将と会見す。直情強行の人物なるが如し。（列車内）
午後五時、旅団司令部にてモーロー大佐と会見す。
所謂米国式にして人格卑し。
午後六時よりジヤナン及モーローを主賓として開宴、午後十時開散す。

一月二十五日　晴
午前四時ベリョゾフカ発、帰途に就く。
午後四時37号待避点着。守備隊巡視す。防禦設備概して可なり。
午後五時半発車す。
此日ペトロスキーザオードに於て、米列車の先後出発に関する件、出来したるも米列車の機関車を本列車に特用して出発せり。但し米列車の了解を得ること不十分なりし感あり。

一月二十六日　晴
午前八時、零点下二十八度。午前十時、十一度となる。
午前八時よりモグソン守備隊巡視、十時完了。
十時半出発す。
午後六時稍過知多着。直に星野中将［庄三郎、野戦交通部部長］の客車に至り会食す。

一月廿七日　晴
午後五時半、将校倶楽部に於ける星野中将の宴会に列席す。九時帰部。
午後九時、零下三十七度。

一月二十八日　晴
午前十一時半、日本新聞記者団十二人と会食す。
午後二時、ポーランド代表武官来訪す。
午後二時半より星野中将主座となり各国代表武官の会同を開き、鉄道輸送に関する意見の交換を行ふ。午後五時半終了す。

一月二十九日　晴
午後二時より代表武官会同に臨席す。
午後五時半より星ノ、高波、倉敷、古沢を招き夕食を共にす。

一月三十日　晴　日中零下三十五度
午前チェックの代表武官来部し、新聞掲載の件に関しジヤナンの意見を開陳せり。
午後一時半より久し振りにて乗馬運動を行ふ。
午後四時より珍田大尉の旅行談ありたり。

一月三十一日　晴　稍風あり
日中零下二十五度。
午前米将校を答訪す。
午後四時、米のメルツ少佐来訪、スチーブンス［ジョン・F・スティーブンス］の電報、即、
　チキツクの専用機関車通過のこと、
　米列車のペトロフスキザオードに停滞にあること、
を述べたり。
次て南次郎方嶋三郎氏の来訪あり。

二月一日　晴
日中零下二十三度。
午後五時半より転出者の為め会食す。
午後七時、桑田侍従武官［安三郎］来知、出迎ふ。

二月二日　晴
日中零下二十三度。
午前九時より侍従武官の聖旨伝達ありて、在知多部隊の巡視に随行す。
午後五時半より桑田、南［次郎、支那駐屯軍司令官］、二子石と会食す。

二月三日　晴
午前仏、チ両武官を会し、ジヤナンの要求事項を聴取す。
午後二時、米国技師大佐と星ノ中将と予との運行に関する会議を開催す。
午後五時半より桑田侍従武官を主賓として会食を行ふ。

二月四日　晴
日中零点下二十一度。
午後六時、コセット少佐来訪。ジヤナンの諒解に関する電報を開示せり。之にてジヤナン対セメノフ問題解決して芽出たし〳〵。

二月五日　晴
日中零下二十一度。
午前コセット及コシエック両武官を招待し、ジヤナン対セメノフ問題の解決を告げ、今後再び此の如きこと演出せざる様、通告し乾杯せり。
午後五時半より星野中将の召宴あり。交通関係の所官武官出席す。
午後十時半、零下二十三度なりき。

（くろかわ　ともこ　　平成25年度歴史文化学科歴史文化演習科目等履修生）
（まつだ　しのぶ　　歴史文化学科准教授・近代文化研究所所員准教授）